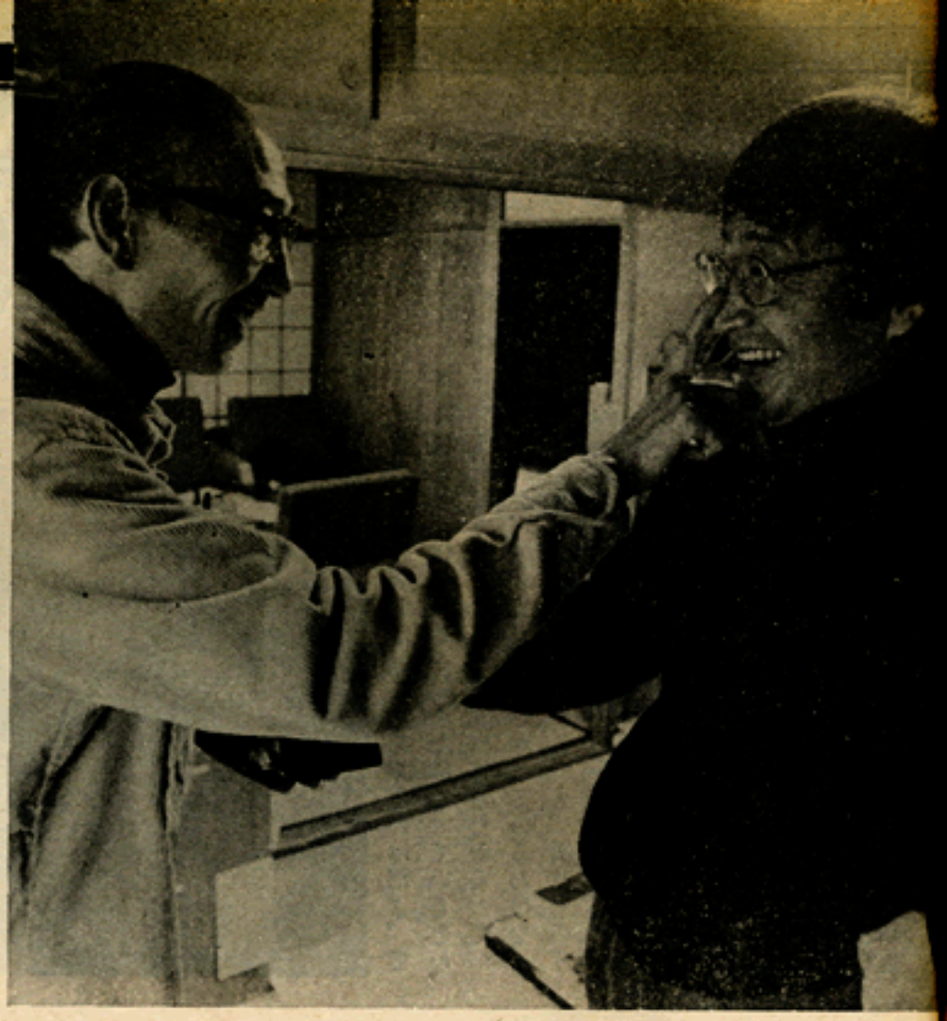


と自分は感じていると。で彼は、自と他の対立のないところでは、完全な喜びとか心の安定というものがえられるけれども、自と他の対立がある世界というのは、どうやっても、人間は淋しいもの、悲しいものという心がつきまとうと。ただし、自と他の対立のないところにはね、そこには対立がないんだから、進歩や、向上という概念は出てこないだろうと。そうするとやっぱり、自分としては数学をやっているんだから、進歩や向上がないわけにはいかないと。といってこれをやっている限りにおいては、淋しさということからは絶対に逃れられないだろうと。だから、自分としては両方の世界を行ったりきたりしながら歩んでいくよりしようがないのかなあと思っていると。で、ぼくは先生の仕事をずっと見せて頂いてきて、昔の「カリグラフィー」以来今日まで一貫して、生まれ出てきたものは簡素で、無限で、すみれの花がただそこに咲いているように、何の不思議もなくただありながら自他を越えて永遠のものと思えるのですけれども、実はその結果を生み出す過程においては、先生は実に厳しくあらゆる可能性を極めつくし、実に複雑な科学的計量というか、自他の区別が隠れていると思うんです。だから……。

佐藤　あのね、今君がいった、岡さんが自他の対立があるところは淋しいといったことね。これは要するに心が落ち着かないということ、人間は心の落ち着く場所を求めているという事実なんですよ。求めなきゃあ別だよ。畢境帰処ともいうところだよね。そこへ向おうとする人間一人一人の願いがあるんじゃない？

中嶋　はい。確かにあります。

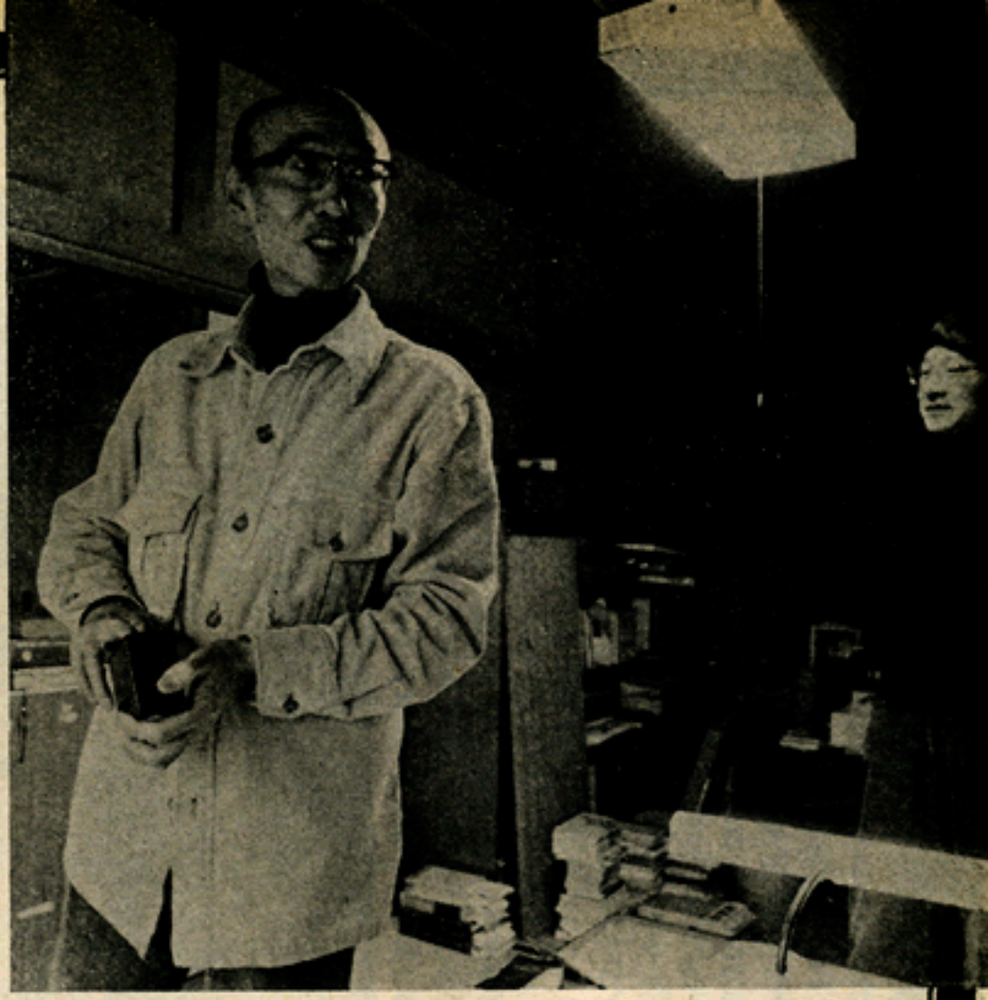
佐藤　そのことが宗教とか哲学とかが起こってきたもとだよ。岡さんがね、自他対立のあるところは悲しい。対立がないところは進歩はないけれども、そこでは落ち着くといったわけでしょ。ここで出てきてることは、分別ということと無分別ということだよ。別のいい方をすると、差別と平等ということもできる。また、迷いと悟りということもできる。科学というのはこの人間の分別の世界の出来事であって、二元的なね、白と黒とか、ありとなしというようなそういう世界の話なんですよ。要するに、人間の思惟の構造とおんなじような構造の中で動いているんですよ。今思惟の構造と仮にいったのは、ことばというのが全部相互規定的な観念によって成り立っているような、そういう構造のことだよ。人間の思考はこの構造の外には出ないわけだ。科学というのは、この中での話だよ。そうするとね、安心と不安心だって、科学的な思考からいえばだよ、不安心ということがなければ、安心ということもないんだ。安心だけの安心というのはない。だとすれば、どこまで行っても安心ということはありえない。つねに次の瞬間が安心であるということは保障されないんだから、科学では絶対安心ということはないんだよ。

中嶋　そうすると結局科学というのは、人間の認識の便利な道具として考えればいいんですか？

佐藤　仏教ではね、こういうふうにいうよ。悟りと迷いというだろう？　悟りはね、わかり方に関して深さがあるからね、俺みたいのがちょこちょこいったってしようがないんだけれどね。悟りの面だけでもないし、迷いの面だけでもない。それが一緒くたになっているのが人間というものなんだ。悟りつつ迷い、迷いつつ悟っているのが人間だ。だから、悟りだけといっているんじゃないんだよ。

中嶋　ああ、ああそうか。

佐藤　そういうふうに考えちゃあ駄目なんだよ。要するにね、迷いの面というのがね、人間の生成発展の面なんだよ。悟りの面というのはね、そのままなんだよ。だから悟りの面にいる場合というのは、満足しているか、満足も不満足もないということですよ。迷いの面というのは、これじゃあいけないとか、何とかしようとかさ、対立が生まれ、我が立てばこっちへ行くんですよ。でも、これじゃあいけないとか、何とかいったとすればね、そ



ここに物事の展開が起こってくるわけだよ。でほんとうはこれが一緒くたになっているというのはさ、こういう展開自体をわかるっていうのが、悟りでもってわかっているわけなんだ。迷いってことがわかるのも、悟りというわかり方で、迷い自体をわかっているわけだ。痛いということもわかり、悲しいということもわかる。だから、悲しいということにある時には、悲しいしかない。うれしいという時には、うれしいしかない。悲しいとうれしいを二つもち出せば、うれしいが悲しいよりよいというように、対比することになるんだよ。人間の生命の流れとしては、一つの悲しいという状態は、それしかないということなんだ。悲しいとうれしいが同時に実存の中にあることはない。絶対のうれしいと、絶対の悲しいしかない。「しかもかくのごとくなりといへども、花は哀措に散り、草は棄嫌におふるのみなり」(正法眼蔵現成公按第一　筆者注)なんだよ。

「対話」を終えて

さて、ここで提出された問題は、私たち一人一人に根源的にかかわると同時に、あまりにも広大なものであるために、私は本稿をどのように整理して終えることができるのか、途方にくれている。

私たちは何故生きるのか。自分はどう生きたらよいのか。社会はどうあればよいのか。幸福とは何か。こういうもろもろの思いは、私たちの青春を訪れた嵐の季節の終わりとともに、今ではめったに心をよぎることもない。私たち大人というものは、自分をとりまく様様な問題を、自分にとってよりよく思える方向に解決し、調整し、妥協し、あきらめる。この社会的な適応をできる者が大人というものであり、できないものは小人である。私たちはよりよくと思う方向に問題を解決できる時はうれしいし、できずにあきらめる時は悲しい。しかし、このよりよくという場合の、よいというのは何だ。よいと判断する自分というもの、主体というものは何なのだ。心理学は私たち人間が、さまざまな欲求から行動を起こすことを述べている。しかしこの欲求は、すべてを所有し、理解したい、永遠に生きたい、完全に自由でありたいという三つの条件を満たさない限り、永遠に満たされることはない。また、池見酉次郎は長年にわたる精神身体医学の実践の立場から、「人間の生活は、つづまるところ不安との戦いである」と述べている。ここでの不安は、愛と信頼に支えられた人間交流を失なう不安、仕事を失なう不安、未知なるものに向って生きる、哲学する心の不安などなどであろう。私たちはそれぞれのもつ現実の中で、この欲求のすべてが満足し、不安がすべて失くなるならば、私たちの心は安らぎ、幸福となるだろう。しかしこれらは可能であるのか。私たちはこれらが不可能であることを知っているからこそ、ささやかな望みを満たすことで満足し、人の内面には深く立ち入らないことを礼儀とし、深刻なことは、ささやかな善意と笑いで心を慰めるのである。それでは、私たちには心の安心とか、幸福などというのは絶対になく、不安に耐え、不安を慰撫し、不安と戦うことだけが生きるということなのか。この不安と戦う人間の武器が、科学であり、技術であった。しかし科学というのは何なのだろうか。科学は人間の不安をすべてとり除くことができるのか。否。「人間や心のことも科学として唯物論的に説明できるはずだ、というだけで、すべての人を説得しようと考えるのは思いあがりというべきである。」(千葉康則「脳と現代」)

ところが私たちがこういう問題を考える場合に陥り易い落し穴は、ピアジェが指摘した①自分が世界の中心に位置していると考える②自分の行為の規則や習慣を、他人にあてはめ、一般的な規準にしたてあげるという、私たちの初歩的な思考の傾向であろう。それだからこそ科学の客観性というものは、自己中心的な見地をすてて、脱中心化を計ることによって初めて成立したのであった。しかし、